



慶應義塾大学ビジネス・スクール

グループにおけるダイナミズム

5

— 集団での意思決定 〈2〉 —

人間は、社会的動物と呼ばれる。実際、我々は、学校や職場でも、家族や友人といる際もつねに他人から影響を受けて判断や意思決定を行っている。もしかしたら、自分では気づかず、無意識のうちに社会的な影響を受けているかもしれない。

10

ルーマニア出身のコダヤ人心理学者、セルジュ・モスコビッチ (Serge Moscovici; 1925 - 2014) は、個人が他者から受ける影響プロセスについて興味深い実験を数多く行った。モスコビッチが同僚のペルソナズと共同で発表した 1980 年と 1991 年の研究を紹介したい。2 つの実験研究を通じて、他者や集団の存在が個人の判断や意思決定にどのような影響を与えるかについて考察して欲しい (Moscovici & Personnaz, 1980; Moscovici & Personnaz, 1991)。なお、実験の手続きや手順は、一部、小坂井 (2013) も参考にして記述した。

15

モスコビッチとペルソナズによる研究 I (Moscovici & Personnaz, 1980)

今回の実験は、色彩に関する知覚を調べるという目的で実施された。この研究は 4 つのフェイズから構成される。実験は暗室の中で実施され、実験に要した時間は 30 分ほどであった。

20

被験者^[1]は、パリ大学に通う女子学生である。彼女たちは、心理学について特別なトレーニングを受けていない。また、色相環や補色について具体的な知識を持ち合わせていない。色相環や補色が問題になる理由については後述する。

実験課題は、白いスクリーンに投影された青いスライドの色彩判断を暗室の中で行うというものである。これに加えて、今回の研究は、光の投射を停止した際に白いスクリーン上に知覚される残像色について

25

[1] 日本心理学会の倫理規程によれば、実験に参加する人物を「被験者」ではなく「実験参加者」と表記するように求めている。しかし実験を行う主体である「実験者」あるいは「実験協力者」や「実験補助者」などの区分が不明確になるので、本ケースでは「被験者」という表記を用いる。

本ケースは、慶應義塾大学大学院経営管理研究科准教授 林 洋一郎によって作成された。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール (〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp)。また、注文は <http://www.kbs.keio.ac.jp/> へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法 (電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない) による伝送も、これを禁ずる。

30

Copyright © 林 洋一郎 (2016 年 6 月作成)